バイノーラル企画

【ソロキャンプＡＳＭＲ】

空と森と川と月と幼なじみ（仮）

脚本　日暮茶坊

2021/05/20　初稿

■登場人物

○美月（みづき）　23歳、女性。

　主人公とは友達以上恋人未満な幼馴染。主人公のことは「きみ」と呼ぶ。お互い好意は持っているが、幼なじみ期間が長すぎて一線を超えられない感じ。明るく活発で面倒見も良いが、根は臆病。夜寝る前に「もっとああすれば良かった」１人反省会を開いてしまうタイプ。インドア趣味で本や映画、ドラマが好きなため知識は多いが、実践での経験がない。

○あなた　23歳男性。釣が趣味。

　＊声などは出さない。

○トラック

■森のなか

//SE　小鳥のさえずり、虫の鳴き声など環境音を少し（森にいるとわかる感じで）

　キャンプ場にやってきたふたり。

　他に人影はない。

テンションのあがってきた美月、

【9】

美月「やっほーーーーー！」

かすかにこだまする美月の声

美月「うーん……！　やっぱり、山に来たらこれだよね！　テンションあがってきたー！」

美月「ほらほら、キミもやってみたら？」

美月「やっほーーーーーーー！」

主人公（恥ずかしくて声出せない。無言）

美月「あーっ、なんでやらないのー？　え？　恥ずかしい？　それじゃ、私が恥ずかしい人みたいじゃん！　もーーっ」

美月「って、ごめんごめん、ひとりでテンションあがっちゃって。こちらは、わざわざお休みの日に付き合ってもらっちゃってる身分ですからね」

照れ隠しにちょっとおどけて

美月「へいへい、わかってますよ。今日はおもてなしさせていただきますって」

美月「とはいえ……ここ、見ての通り何もないんだけどね」

美月「キャンプ場って、もっと色々準備されてるとこもあるけど、ここは違うんだなー」

美月「あ～大丈夫大丈夫。ちゃんと私が色々準備してきてるから。この日のために道具も揃えたし、動画とかで色々勉強してるからね♪」

主人公（へぇ、詳しいんだ。意外）

美月「え？　実際にキャンプはしたことあるのかって？　も、もちろん（動揺）」

美月「っていうか、一緒に行ったの忘れたの？　ほら、小学校の頃……ウチとキミの家の家族で」

主人公（ええっと……）

【9】→【1】

美月「本当に覚えてないのー？」

美月「私はあの日、すっごく楽しかったんだけどなー。そっかー、覚えてないんだー（主人公も覚えているのがわかっていて、悪戯っぽく）」

美月「だから今日だって……（キャンプを選んだのに）」

【1】→【3】

美月「おっ！（気づき）」

【9】しゃがみ

美月「隊長！　さっそく美味しそうなキノコ発見であります！」

しゃがんでキノコを取り、匂いをかぐ美月。

美月「（くんくん……）これは、土の香り！」

美月「……え？　どうみても毒キノコ？　えっ⁉（ごまかし）……も、もちろん知ってるわよ。誰も食べるなんて言ってないしー」

美月「そんな疑わしそうな目で見ないでよー。もう、子どもの頃と違うんだから、そんなムチャしないってば」

【9】立ち

美月「ほら、文明の利器！　スマホ！　何か困った

り、怪しいなーって思ったら、これで調べれば……」

美月「あれ……圏外……？」

主人公（え？　ホントに!?）

美月「電波さーん……おーい……あれ……おっかしいなぁ……サイトには繋がるって書いてあったのに……」

【9】～スマホ持ったまま、少しうろうろ（主人公の周り移動）。

美月「……うん。ほら、これはアレだよ。神様が今日は俗世間のことなんて忘れて、しっかりリフレッシュしなさい！　って言ってるんだよ。ね？」

美月「とにかく、今日は私が連れてきた以上、しっかり楽しんで休んで帰ってもらうんだから。キミも遠慮なんかしないでよ？　何かあったら、すぐ言ってね？」

美月「……だって、小さい頃からそうだったじゃん。周りの大人とか、私にまで気を遣ってさ。本当に言いたいこと言わなかったりして……」

主人公（う…………（図星））

美月「わかるってー、そのぐらい。何年キミの幼なじみやってると思ってんのさ」

美月、可愛く女の子らしく

美月「だから、今日ぐらいは、ね」

美月「フフッ（悪戯っぽく笑って）、それじゃ、さっそく準備、開始～！」

○トラック2

■森のなか

美月「さてと、それじゃ最初はたき火の材料集めからだね」

美月「その辺に落ちてる、乾いた枝とか葉っぱを集めるんだよ。はい、ちゃんと軍手してね。ケガとかしないようにね」

//SE　パキッと枝を踏み抜く

美月「わっ……きゃっ」

バランスを崩し、倒れかける美月。
それを主人公が手を引いて助ける。

美月「ご、ゴメン……！　大丈夫!?」

主人公（俺は平気だけど、美月は？）

美月「わ、私は平気……土がやわらかいとこで滑っちゃっただけだから」

美月「でも……キミ、意外と力、強いんだね」

主人公（そうかな……）

美月「ふふっ。昔はホント、ガリガリで怖がりだったのに。今はすごく……（しっかりして）」

美月「……っ」

恥ずかしいことを言いかけている自分に気付き、

美月「そ、それじゃ、薪拾いいこっか。今度は気をつけていくからさ」

//SE　森のなかを歩いて行くふたり

【11】

美月「森のなかって……意外と薄暗いね」

美月「ちょっと前に、遊んでたホラーゲームがあって……夜、こういうとこでゾンビになった野犬とか熊とかに襲われるんだよね」

//SE　パキッと枝折れる

美月「ひゃっ！」

主人公（……手、出して）

美月「え？　手……？　繋ぐの？　ええっ？　なんかそれ、私が子どもか……その……こ、恋人みたいじゃや」

//SE　あきれた主人公歩く、美月置いてく

【12】

美月「冗談、冗談だって！　置いていかないで！　手つなぐから！」

【11】

美月「よく考えたら軍手越しだしね、セーフってことで♪」

主人公（何がセーフなのかわからない……）

美月「それじゃ、改めてれっつご――」

//SE　バサバサっと近くで鳥が飛び立つ音

美月「きゃあっ!!」

腕にしがみついてくる美月。

【11】→【3】

美月「な、何!?　何出たの!?」

美月「と、鳥？　ホントに!?　なんか怖いやつじゃな

くて？」

美月「はぁぁぁぁ……（ため息）」

主人公（そんなに怖がってるの、美月だけだよ）

美月「だ、だって、しょうがないでしょ。怖いものは怖いんだから……」

美月「……え？　離れないで一緒にいるから大丈夫？　（照れ）そ、そんなの当り前でしょ。幼なじみなんだから……！（自分でも混乱）」

美月「でも……ありがと」

前方を見て美月、少し開けている場所に気づき

美月「あ……（気づき）、向こうの方、ちょっと明るい！　行ってみよ！」

足早に開けた場所に向かうふたりで――。

○トラック2-2

■森のなか（少し明るい、気持ちの良い場所）

美月「わぁぁ……ここだけ木がすっぽり抜けて、明るくなってるんだね」

美月「ふーーーー（深呼吸）
やっぱり、自然のなかで深呼吸っていいね。
デトックス効果とかあるんじゃないかな」

美月「ほら、キミもふーって」

主人公（ふーーーーーっ）

美月「そうそう。胸いっぱいに自然の空気を吸い込んで……ゆっくり吐いて……」

美月「静かだね……」

//SE　風の吹き抜けていく音
　かすかに鳥と虫の声

美月「ちょっと座って休憩ね」

主人公（うん）

美月「街だとさ、どこにいても何か音がするでしょ？ひとりで部屋にいてテレビを消したとしても、誰かが近くにいる雰囲気っていうのかな。それが当り前になっちゃってるけど」

美月「こうして本当に静かな所に来ると……鳥の声とか、風の音とか聞こえるけど、それでもすごく静かで、心安まるなぁって」

美月「自然の音って、どうしてこんなに染みるんだろう……」

美月「はぁ…………ふぅ…………（深呼吸）」

しばし環境音のみ。

＊とりとめもない話題1

美月「この前、スーパーでばったりおばさんに会ってさ。たまにはうちの子も遊びにさそってやってね～なんて言われちゃって」

美月「もう、お互いうちの子って歳でもないのにね。ふふっ。おばさんやウチの両親から見たら、いつまでも子どもなんだろうね～」

＊とりとめもない話題3

美月「今日のこの後の予定？　うーん、予定ってほどのことは何もないけど」

美月「だって、今日の目的はゆっくりすることだも

ん」

美月「たまにはいいんじゃない？　テントとご飯の準備だけしたら、あとはお昼寝とかでも」

美月『何もしない』をするってことで」

美月「(気づき) あっ、ちょっと見て、そこの木のとこ、キレイな蝶々」

美月「そうだ、電波入らなくてもカメラ使えるよね」

//SE　撮影音

美月「ふふっ。キレイだな～。待ち受けにしちゃおうかな」

美月「キミの写真も撮っておくから、なんかポーズ取って」

美月「言ったでしょ、この前、おばさんに会ったって。後で写真送るって言っちゃったんだもん」

主人公（えええええ……）

美月「私も入るから、文句言わないの。はい、チーズ」

美月「……うん、よく撮れた。あとでそっちにも送っとくね♪」

//SE　撮影音

＊たき火探し

美月「それじゃ、そろそろちゃんと薪拾いしよっか。ある程度量がないと、夜困っちゃうからね」

＊以下たき火知識。

たき火の薪を探している所で適宜差し込んで頂け

れば。

美月「乾燥してるかどうかは、大体触ってみれば分かる気もするけど……こうして（SE:パキっと折る）音がするのは、乾燥してる証拠だね」

美月「こうして葉っぱを集めたり、あと木を切ったりなんかするのも、森の日当たりとか風通しをよくしたりとか、森を育てることに繋がるんだって……って、有名なキャンプ配信の人も言ってた」

美月「落ち葉とか松ぼっくりもよく燃えるから、一緒に集めていこうね。あ、でもドングリはダメだよ。火に入れたら弾けちゃうことあるって」

＊雨がぱらついてくる

美月「……あれ？　今、ちょっと、ぽつっとこなかった、雨」

美月「ええ……困る……今日は雨は大丈夫って、天気予報ちゃんと見てきたのに」

美月「とりあえず、今拾ってある薪だけでも十分だと思うから、雨宿りできるところまで行こ。走ったら転ぶからね！　これフラグじゃないから！本降りになる前に、急いでゆっくり！」

//SE　小走りで森の中を移動する

○トラック３

雨が降っている。
主人公と美月、張り出した岩陰の下に到着。
しかし、結構濡れてしまっている。

//SE　パシャパシャとぬかるんだ道を歩く音
　～足音止まって、

美月「ふぅ……ここの岩陰なら雨宿り出来そうだね。チェックしといて良かった」

美月「え、なら雨もって……だから、天気予報だと大丈夫だったんだってば～。大体、人に文句言うぐらいならキミもちゃんと見といてくれれば――」

美月「……？（不思議）どうしたの？」

美月「（気づき）あ……濡れて透けてる……」

美月「あはっ、ははは っ！（恥ずかしくてごまかし）気にしない気にしない、こんなのすぐ乾くって！」

美月「ただ、ちょっと……その……しばらく、こっち見るの禁止で」

【4】

美月「と、とりあえず……濡れた上着は脱いだ方が良さそうだね、風邪引いちゃう」

//SE 衣擦れの音

美月「ほら、キミも脱いで脱いで」

美月「何恥ずかしがってるの？ フフッ……お姉さんが手伝ってあげようか？」

美月「はーい、ぬぎぬぎしましょうね～」

//SE 衣擦れの音

美月「はい、良く出来ました。ふふっ」

//SE パンパンと、はたくようにして水を切る音

美月「じゃあ、この辺で乾かしておくね」

美月「ふぅ……（一息ついて）」

美月「あ（気づき）、あっちの空見て、もう明るくなってる。ちょっと待ってたら、すぐ晴れるんじゃないかな」

美月「って、だからまだこっちは見ちゃダメだって！　は、恥ずかしいんだから……」

美月「もしかして……わざと？」

主人公（そんなことないよ！）

美月「へぇ……そんなに必死に否定して、怪しいな～」

美月、やや芝居がかった調子で

美月「人気のない森で、可愛い幼なじみとふたりきり……急に雨に降られて雨宿り中、雨に濡れた彼女の艶やかな肌に、ボクはボクはもう……！」

美月「なーんて、変なコト考えてたんでしょ？　ねえ？（悪戯っぽく）」

美月「え？　私が風邪引かないか心配なだけ？　もう、子どもじゃないんだから大丈夫ですー」

美月「……くしょん（くしゃみ）」

美月「あはははは……（照れ笑い）」

//SE　主人公、ガサゴソとタオル取り出す

美月「あ……タオル、ありがと」

美月「すー……（息を吸う）」

少し演技がかって、

美月「なんだかこのタオル、キミの匂いがするみたい」

美月「ううん、嫌じゃないよ……」

美月「って、何で笑うの！　そこはキミも少し照れてはにかむとこでしょ！」

美月「まぁ、実際、ちゃんと洗ってあるっぽいから洗剤の香りしかしないけど……」

美月「キミはアレだね、こういうシチュエーションでの情緒みたいなものがわかってないね」

美月「少女マンガとか読んで、少しは勉強した方がいいよ？　こういう時に、どうしたら女の子がドキッとするか、みたいなの」

美月「そうじゃないと、いつまで経ってもひとり身のままなんだからね」

美月「……ま、私は別にそれでもいいけど（呟き）」

主人公（え？）

美月「なんでもありませんー（ちょっと拗ねて）」

美月「そうそう。この前、キミのお母さんに言われちゃったんだからね。あの子に誰かいい子、いないかしら～って」

美月「なんで私がそんなことまで心配してやんなきゃいけないのよ」

美月「しかもなんか、キミのお母さん、私のことじーっと見てニヤニヤしてたし……」

美月「ま、まぁ、私、別にキミのとこのお母さん嫌いじゃないけどね」

美月「ちっちゃい頃から色々お世話になったし……優しいし……」

美月「で、そんなことよりいい子いるの?誰?　会社の人?　学校の時の人?」

【8→1→2】と揺れている感じで

美月「いいじゃん、教えてよー。ねーねー」

美月「私にだけは教えないって……ちょっと、それどういうこと?」

美月「え?　今はまだダメって……もう、そればっかりじゃん。なんなのよ、もう」

美月「このキャンプ中に、ぜーったい聞き出してやるんだから。覚悟しなさいよ」

美月「(気づき) あれ……雨、やんでない?」

//SE　立ち上がり、前に出る

【16】
美月「ほらほら、やんでる!　っていうか、来て!」

//SE　立ち上がり、前に出る

【7】
美月「ほら、あそこ……!　虹……!」

美月「綺麗だね……」

主人公 (うん)

美月「ふふっ。なかなかレアな体験じゃない?　キャンプに来て、雨に降られて、虹が出て、なんて」

美月「これなら雨に濡れたかいもあるってもんね」

美月「あ、そうだ、写真写真」

美月「キミも入って。記念なんだから」

美月「でもそういえば……ふふっ。ううん、ちょっと、小学校の卒業アルバムの集合写真、思い出しただけ」

美月「キミだけ必死に目を見開いて、カメラの方見てるの。もー、おかしくって」

美月「え？　ちょ、ちょっと、キミが見るのはダメ！　それは禁止」

美月「なんでって……恥ずかしいじゃん。あの頃の私、なんか丸々としてて可愛くなかったし」

美月「だいたいアレ、キミが悪いんだからね。おかしとかやたら私にくれるから、全部食べなくちゃって思って……」

文句を言いたいわけではないと気を取り直して

美月「ま、いいや。そんな昔のこと言ってもしょうがないし（苦笑）」

美月「それより、今の写真が欲しいの」

//SE　撮影音

美月「ふふっ。やっぱり目、まんまるに開いてる。変わらないね」

美月「さてと、それじゃ晩ご飯の準備しよっか」

美月「材料？　それはもちろん、これから調達するに決まってるじゃない」

美月「キミ……釣、得意だって言ってたよね。期待してるから♪」

○トラック４

■川辺
　魚が取れそうな川辺に到着。
　静かな森のなか、川のせせらぎの音。

美月「おっ、ここなんかいいんじゃない？　釣れそうだよ」

美月「雨あがりって、釣れやすいんじゃなかったっけ？」

美月「一応、ガイドにはニジマスとかイワナが釣れるってあったね」

美月「釣り系の配信動画で勉強してきたから、もしかしたらキミより釣れちゃうからもね～」

美月「なんなら勝負する？　勝った方が、負けた方の言うこと何でも聞くの」

美月「……え？　普通逆じゃないかって？　ちっ……（舌打ちのマネ）バレたか」

美月「それじゃ、勝った方が負けた方に何か罰ゲームやらせる、これでいい？」

主人公（まぁ、いいけど……）

美月「よし、それじゃあさっそくやってみよっか」

美月「あ、言い忘れてたけど、さっきの勝負、ハンデとしてキミの方は釣れた数のマイナス３匹ね」

主人公（は⁉）

美月「だって、初心者相手に普通にやったら勝負にならないでしょ？　それとも、釣が趣味だって言ってたのはウソ？」

主人公（ハメられた気がする……）

美月「それじゃ、さっそくだけど……エサ、つけてもらっていい？　私、このちっちゃいのがうにょうにょっていうのがダメで……」

主人公（ハァ……しょうがないな）

美月「ありがとう！　よーし、釣るぞ～！」

○釣中の美月のアクション

大きく伸び
美月「うーーーーん……」

あくび
美月「ふあぁぁぁぁぁ……」

ぼーっとしていてふと気付く
美月「……っと」

ため息
美月「……はぁ」

失敗
美月「あっ……（ぽちゃん）……ふぅ（残念）」

セリフ集
美月「そっちどう？　釣れた？」
美月「そろそろ来そうな気がするんだよね～」
美月「まぁ、焦らない焦らない。ひとやすみ、ひとやすみ」
美月「あっれー、おかしいなー」
美月「釣れたらやっぱり塩焼きかな～」
美月「焼き魚に大根おろしって考えた人、天才だよ

ね。まぁ、今日はさすがに大根ないんだけど」

683 美月「こうしてぼーっとするのも、たまにはいいね……」

美月「何匹釣れるかな～」

美月「線路沿いにさ、釣り堀あるでしょ。平日の昼間から結構人いて仕事とかどうしてるんだろうって思ってたけど、こうして自分もやってみると、なーんかわかる気がするなー」

美月「ふぅ…………」

美月「はぁぁぁ……」

美月「よっと……」

美月「……あれ」

美月「ふんふんふん♪～（適当な鼻歌）」

○次第に眠くなっていく美月

美月「ん…………」

美月「ふぁぁぁぁ……」

美月「ああ……っと……」

美月「え……寝てないよ……寝てない……」

美月「……っ（ガクン）」

美月「ううん……（眠い）」

美月「ダメだ……今日楽しみ過ぎて早起きっていうか、昨日あんまり寝てなくて……ねむい……」

美月「ちょっとだけ……ちょっと休憩」

美月「うん……ちょっと……」

【7】主人公の方に頭乗せる感じで

美月「肩貸して……うん……これ、いい枕……」

美月「すーすー（寝息）」

　　穏やかな寝息、しばらく。

　時折寝言。

美月「……うん……美味しいよ……」

美月「ダメ……そんなこと言えないってばぁ……」

美月「ふふふっ……ふふふふっ……」

美月「……（す）き」

美月「……牛すき」

美月「……なんちゃって……」

○トラック５

//SE　バシャバシャッと魚のかかる音

美月「えっ？　ふえっ？　あっ！　かかってる！
かかってるよ！　起きて！　逃げちゃう！」

　慌てて魚を釣り上げようとする主人公。

美月「そーっと、そーっと……！」

美月「そうそう、そのまたぐりよせて……」

美月「（バシャッ！）あっ！　……っと、まだ大丈

夫「　慎重に……！」

美月「っ！　網の準備するっ！」

バタバタと網の準備をする美月

美月「いいよ、いいよ……そのまま……」

バシャッと顔を出す魚
それをすくいあげる美月。

美月「やったー！　釣れた！　おめでとう！」

美月「すごーい！　すごーい！　これ、ニジマスだよね？　うわー、ホントに釣れたー！」

美月「やるねぇ、キミもなかなか。だがしかし、今のは私の網のフォローがあったことを忘れてはいけないよ？」

美月「つまり、今の釣れた魚の半分の権利は、私にもある！」

美月「……ってウソウソ。もちろんキミの釣った分だって」

美月「え……？　共同作業……？　ちょ、ちょっと、何言って……それはそう……だけど……」

少し照れて、それを隠すように

美月「もう！　それじゃ、もっとじゃんじゃん釣って！　そしたらじゃんじゃん網ですくってあげるから！」

//時間経過

美月「ふぅ……結局、全部キミが釣ったので３匹か。でも、まぁまぁじゃない？」

美月「ま、勝負はハンデ分の３匹引いて、プラマイゼロってことで」

美月「あー、残念だなー。ちゃんと罰ゲームやるつもりだったのにな～（棒読み）」

美月「ちなみに、魚以外はちゃんと食材持って来てるから大丈夫だよ。ご飯も炊くからね」

美月「ふふふっ。釣るのはダメだったけど、料理はちょっと自信あるからね～」

美月「もちろんキミも手伝ってくれるよね♪」

○トラック６

食事を終えて、たき火を囲んでいるふたり。

//SE　パチパチとたき火の音

美月「ふーっ……晩ご飯美味しかったねぇ」

美月「飯ごうで炊いたご飯もだけど、やっぱりキミが釣ってくれたニジマス！　塩で味付けしただけで、あんなに美味しくなるなんて……」

美月「ふぅ……（ちょっと落ち着いて）」

美月「そうだ、コーヒー飲まない？　美味しいの持って来てるんだ」

美月「ちょっと待ってね、お湯沸かすから」

//時間経過

//SE　カップにドリップパックを通してお湯を注ぐ音

美月「はい、どうぞ。熱いから気をつけて」

主人公のカップを渡し、自分のコーヒーも煎れる美月（カップにお湯注ぐとこから）。

美月「ふーっ……ふーっ……」

美月「あちっ」

美月「ふーっ……ふーっ……」

美月「……うん（熱いのでちょびっと）」

美月「やっぱまだ熱いや。でも、いい香り……」

美月「コーヒーの香りをかぐと、いわゆる脳にアルファー波が出るんだって。そうそう、リラックスした時に出るやつね」

美月「ホントかどうかよくわかんないけど……でも、ゆったりした気分にはなれるよね」

美月「ふーっ」

少し飲んで息を吐く

美月「はーーー……」

たき火の音などで時間経過

美月「え、特に面白い話とかなくてゴメン？」

美月「ふふっ（苦笑）。無理にそんなのしなくていいよ」

美月「こうして、ぼーっとたき火見ながらコーヒー飲んで……たまに夜の動物とか虫の声が聞こえてきたりして……」

美月「夜空を見上げれば、ほら……」

美月「街じゃ見られないような星空が広がってる。

これ以上、何かいる?」

美月「すごく、贅沢な時間だよね……」

演技か本気かわからないテイで

美月「ん………それとも何? 私とふたりだとつまんない、とか?」

主人公(そんなことないって!)

美月「……良かった」

美月「ふふっ(微笑)……」

再度、たき火の火の音などで時間経過。

美月「ん……なんか、たき火の音って眠くなるね」

美月「あ……まだ寝ない……その前に、やることあるから」

美月「キミも……このままじゃ、眠れないでしょ? 大丈夫、私に任せて」
意味ありげに、

美月「特別な夜には、特別な想い出を作らないと……ね」

○トラック7

【9】
美月「ちょっと待ってね……」

//SE がさごそと草むらの上にシートを敷く
マッサージの準備をする美月

美月「はーい、お客様。こちらにお座りください」

主人公（え……）

//SE　パンパンとシート叩いて

美月「ほら、遠慮しないで」

主人公（えええ……）

【９】→【１３】
シートの上に座った主人公の背後に回る美月

美月「あのね……今日は一日、ありがとう。私から誘ったのに、結局、力仕事は大体キミにお任せすることになっちゃって」

美月「だからね、せめて疲れを取るために、マッサージしてあげる」

美月「じゃないと、明日帰って筋肉痛とかだったら、何のためのお休みだったの？って言われちゃうでしょ」

主人公（そうかなぁ）

美月「まぁまぁ、遠慮しないで」

美月「こう見えて、私、普段からお父さんとかお母さんにもマッサージして慣れてるから」

美月「それじゃ、はじめるね」

美月「まずは、肩から揉んでいくよ」

美月「あ……あれ……（気づき）、かたっ」

美月「ちょっと―、肩こりすごいよ？　これ、今日の作業がどうこうじゃないでしょ」

美月「普段から相当疲れが溜まってるんじゃない？」

美月「だってほら、肩のとこ、全然指入らないもん」

美月「でも大丈夫、しっかり揉んでくからね」

美月「あ、もちろん無理矢理だと痛めるから、強すぎたりしたら言ってね」

美月「さてと……じゃあ……」

首から肩にかけてをさすっていく

美月「首から肩にかけての血流がよくないんだと思うよ。専門家じゃないから、詳しいことはわかんないけど……」

美月「こうして、血液の流れにそって、さすってあげるだけでもいいみたい」

美月「くすぐったくない？　大丈夫？」

美月「……あ、こんなことにほくろ発見」

美月「ふふっ。意外と知らないこと、まだまだあるもんだね」

美月「あ、あとキミ、意外と姿勢悪かったりするから、こうして……もう少しほら、胸を張って」

美月「それだけでも肩こりとか、腰とかの負担減るみたいだよ」

美月「あと……多分、眼精疲労がすごそうなんだよね」

美月「仕事とか、ちょっと根詰めすぎじゃない？」

美月「あ、スマホのゲームのやり過ぎとかは知らなーい。そこまでは責任持てません」

美月「ふふっ。それじゃ、頭の後ろからマッサージ

してくね。大丈夫、痛くしないから」

頭の後ろのツボを指で押していく

美月「ん……」

美月「……っ（強く力入れる）」

美月「……ふぅ」

美月「どう……かな」

美月「そのまま首の方いくね」

首のマッサージをする

美月「あー、やっぱり首もガチガチだ」

美月「ん……っと……」

美月「これで、さっきよりは少しはいいかな……」

美月「もっかい、肩の方いくね」

美月「う……やっぱかたい……」

美月「ん……しょっと」

美月「ふぅ……」

美月「うん……」

美月「はぁ……はぁ……」

美月「お父さんたちにやる時より、これは大変だわ……」

美月「キミ、普段マッサージとか整体とか行かないの？」

美月「え？　おっさんくさい？」

美月「ハァ……あのね、こんなガチガチにしといて、そんなこと言ってる場合じゃないよ」

美月「他の人に身体触られるの苦手……？」

美月「そ、そうなんだ……」

美月「あの……ごめん、本当はいやだった？　私にマッサージされるのも」

主人公（そんなことない！　大丈夫だよ！）

美月「(安堵) よかったー、びっくりした」

美月「でも、私だけには触られても大丈夫って……もう、そういうこと、他の人には言っちゃやダメなんだからね」

主人公（なんで？）

美月「なんででも！（照れて)」

照れを隠すように

美月「はい、肩終わり！　ほら、さっきよりも大分緩んだ感じあるよ」

美月「少し肩、回してみて」

美月「そうそう、肩甲骨動いてるのわかる」

美月「なら、次は腕ね」

＊ここからマッサージメイン
会話よりも息や間で芝居して頂けると助かります。

美月「力抜いててね」

美月「そうそう……」

　上腕から下腕にかけて揉んでいく

美月「もみもみ」

美月「ふふっ……二の腕は柔らかいね」

美月「おお、やっぱり筋肉あるなぁ」

美月「お父さんより腕長いから大変」

美月「ああっ、もう動かないの」

美月「え？　胸当たりそう？　我慢しなさい！」

美月「あ、わ、私の？　ご、ごめん……」

美月「じゃ、じゃあ、左腕いくね」

美月「…………」

美月「でも、身体のメンテナンスは本当に大切なんだからね」

美月「だって……キミにもしものこととかあったら、私……」

美月「急にヒマになっちゃった休日とか、誰を誘えばいいの！」

美月「え……他に友達？　い、いるよ、当り前でしょ」

美月「ただ……その、キミがヒマしてるんじゃないかなって」

美月「昔から、結構ひとりでいること多かったし」

美月「あ、嫌ならいやって言ってよね。私だって、無理矢理誘ったりなんかしないんだから」

主人公（だからいやなんかじゃないって）

美月「……そう。なら良かった」

ハンドマッサージに以降

美月「じゃあ、次は手を出して。そうだね、右手から」

美月「ここら辺のツボ、どうかな？」

美月「痛い？　ってことは、腰かな……こっちはどう？　え？　もっと痛い？」

主人公（だから痛いって！）

美月「わかったわかった、もうしないから（苦笑）」

美月「それじゃ、こんなのはどう？　こうして、指を絡めて……」

美月「こうして、ぎゅっとして。力入れてみて」

美月「もう、何恥ずかしがってるの。こ、これは、マッサージなんだからね」

美月「へ？　わ、私だって平気じゃないよ！　でも、これはマッサージだからいいの！」

美月「まったく……誰にでもしてると思ったら大間違いなんだからね」

美月「もう……ほら、左手」

足のマッサージに移行

美月「じゃあ、次は足ね。うつ伏せになって」

美月「靴下脱いじゃおうか。私も脱ぐから」

主人公、うつ伏せに。
足で足裏を踏む美月。

美月「それじゃ足裏、踏んでマッサージしてあげる」

美月「もし痛かったら言ってね」

美月「……よっと」

美月「ここの土踏まずのとこを……」

美月「いちに、いちに、いちに……」

美月「ふふっ。キミ、足おっきいね」

美月「うん、これは踏みごたえがある」

美月「ええー、いじめられてるみたい？　そんなことないって。失礼な」

美月「お、重くなんかないよ！　わざと力かけてるだけで！」

美月「もう、静かにしてて」

美月「ん……っと……」

しばらく足踏み

美月「ふぅ……こんなもんかな」

美月「はい、今度はふくらはぎから揉んでくね」

右足からマッサージしていく

美月「え？　くすぐったい？　ちょっとは我慢しなさい」

美月「……こちょこちょこちょ」

美月「ははははっ、ごめんごめん、真面目にやるから」

美月「よいしょ……っと……（気づき）あ、やっぱりふくらはぎも結構張ってるね」

美月「そりゃそうか、普段そんなに歩かないもんね」

美月「もみもみもみもみ……ふふっ」

左足に移動

美月「はい、反対の足いくよー」

美月「あー、こっちも張ってるね。お客さん、今日は随分頑張ったんですねー」

美月「大丈夫？　くすぐったい？」

美月「気持ちいいんだ……そっか、うん、なら良かった」

美月「あれなら、寝ててもいいからね」

美月「ま、寝たら何するからわからないけど……（微笑）」

美月「冗談だって、そんな変なことしないよー」

美月「さてと……あとは、あそこだけだね」

美月「身体起こして座って」

【1】急に目の前に来る

美月「はい、目を閉じて」

美月「大丈夫、優しくするから。リラックスして……」

美月「それじゃ……いくよ」

ギリギリと頭のツボを押してくる美月

美月「頭のツボってね、結構きくらしいよ」

美月「ぎゅっ、ぎゅっとね……どう？」

美月「美容院のお姉さんとか、これ上手いんだよね」

力を入れていく美月

美月「んっ……」

美月「ふっ……ふっ……」

美月「ふぅ………」

美月「他、どこかマッサージして欲しいところとかある？」

主人公（大丈夫です）

美月「ホントに？　すっきりした？」

主人公（もちろん）

美月「そっか、良かった♪」

美月「それじゃあ……大サービス！　お客さん、ついてるね～」

美月「耳かきしてあげるから、もっかい横になって」

○トラック８

美月の膝枕で耳かきをしてもらう主人公。

膝に対して横ではなく、縦に寝る。
主人公が動くのではなく、美月が身体を左右に動かして、左右の耳を覗き込む感じ。

美月「ふふっ、これって膝枕……だよね。なんか、してるこっちが緊張しちゃうかも」

美月「だって、ちっちゃい頃から一緒でも、こんなことしたことなかったし」

美月「お父さんやお母さんにも、さすがにやらないよー」

美月「あ、子どもの頃、お母さんにやってもらったことはあるけど」

美月「はい、それじゃお客さん、じっとしててくださいね〜。動くと、耳の穴にぶすっといっちゃいますよ〜」

美月「大丈夫大丈夫、任せといて。悪いようにはしないから」

美月「ああ、膝枕の向き、横じゃないのかって？　こっちの縦向きの方が痛くないでしょ？　前に読んだマンガに書いてあったんだ」

美月「ほら、こうして足の間にすっぽり頭が入る感じで……ね？」

美月「それじゃ、ちょっとだけ身体傾けて、そうそう、よく見えるように」

【7】近く
美月「おおー、なんか人の耳の穴のなか、マジマジと見ることってないから面白いね」

美月「あ、そうだ、知ってる？　耳のなかに火薬入れて、ぱーんってやって掃除するやつ」

美月「え？　ああ、今はそんなの持ってないよ。普通に耳かきでやるだけだから」

美月「次までには用意しとくね♪」

美月「って、冗談だよ、冗談。普通にやるから」

美月「それじゃ、はじめるね」

//SE　ここから耳かき音継続

美月「動かないでね……」

美月「お、入った、いい感じ」

美月「……ふぅ」

美月「ほうほう」

美月「……うん、そうそう」

美月「あっこれ……意外と楽しいかも……」

美月「気持ち……いい？」

美月「耳かき、人にやってもらうのっていいよね……いいでしょ？」

美月「……ふーっ」

美月「へ？　ただ息吹いただけじゃん。ダメ？」

美月「よしよし……もうちょっとじっとしててね……」

美月「奥の方も……なんかダンジョン攻略してるみたい」

美月「人の身体って不思議だねぇ」

美月「うんうん綺麗になってきた」

美月「それじゃ、こっち側あとちょっとだから」

美月「よーし、仕上げちゃうぞ」

美月「えいっ……っと……おお、良い感じ……」

しばらくカリカリと

美月「あ、まだ……」

美月「いけそう……あとちょっと……」

美月「んっ……そう、そこ……」

美月「うん、大丈夫……」

美月「はぁ…………んっ」

美月「うん！これでバッチリ！スッキリしたでしょ？」

美月「それじゃ、最後に（ふーーーーーっと長く息を吹きかける)」

【3】

美月「反対側いくよ～」

美月「それじゃお客さん、力抜いて楽にしてくださいね～」

美月「少しずつ掘っていくからね～」

美月「ん……」

美月「しょっと……」

美月「ちょっとだけ身体、こっち……そうそう」

美月「いい角度……うん、そう……そこ」

美月「良い感じ♪良い感じ♪」

美月「あ……っ……うんっ……」

美月「いけそう……うん……」

美月「あっ……ふぅ……よし！」

美月「ふふっ、気持ちよさそうにしてる」

美月「それじゃ、もっと気持ち良くしてあげるね」

美月「ふーーーーっ（息吹きかける）」

美月「ふふっ、キミ、耳弱いね」

美月「うん、可愛い」

美月「はい、もうちょっとだからじっとしててね」

美月「……うん、おっけー」

美月「はい、綺麗になりましたー」

美月「え？　もう少しこうしてたい？」

美月「ま、まぁ……いいけど」

美月「寝ちゃうの？」

美月「風邪引いちゃうよ？」

美月「もう……だーめ。寝るなら、ちゃんとかけて寝ないと」

美月「休んでていいから、ちょっとだけ待ってね」

美月「テントで寝る準備、しちゃうから」

○トラック９

　パチパチとたき火の音が響くそばで、
　横になっているふたり。

【９】横になって寝ている目の前

美月「なんだか……こうしてふたりでいるのって、
今更だけど不思議な気分だね」

美月「修学旅行とかでも、一緒に寝るってなかった
じゃん？」

美月「本当にちっちゃい頃、お互いの家でお昼寝と
かはしてた気もするけど……」

美月「大体、お父さんもお母さんもおかしいよね。
私がキャンプ行くって言った時、キミと一緒なら
大丈夫だろうとか、安心して任せられるとか」

美月「面倒見てるのは、私の方だってーの。もー」

美月「大体、普通は男女で泊まるとか言ったら心配
するとか反対するとかあるでしょうに」

美月「そういうの、全然ないんだよねー、ウチの人
たち。まったく」

美月「ま、変に文句言われるより、いいけど……」

美月「…………」

美月「…………」

美月「…………」

美月「……もう、寝ちゃった？」

主人公（まだだけど）

美月「何か、おはなし」

美月「私ばっかりしゃべってる」

主人公（そんなこと言われても）

美月「なーんてね。無理に話とかしなくてもいいよ」

美月「ただ、もうちょっと起きてたかっただけ」

美月「だって……この時間がもうすぐ終わっちゃう
のが、なんだかもったいなくて」

美月「ん……ほら、耳を澄まして」

たき火の音や環境音が微かに聞こえる

美月「今、ここには何もない」

美月「余計なしがらみも、ストレスも、めんどくさ
いことぜーんぶ置いて来ちゃったの」

美月「いるのは……キミと、私だけ」

美月「こんな贅沢、他にないよ」

美月「どんなにお金出したって買えるものじゃない」

美月「今、この場所……この空……この時間……」

美月「私……忘れないよ。ずっと、ずっと……」

美月「キミにも……覚えてて欲しいな」

美月「うん……そうだと、嬉しい」

美月「キミも少しは休めた、かな？」

美月「うん……なら良かった」

美月「いつでも言って。辛い時、悲しい時……
ふふっ。本当は、楽しくて幸せな時が一番だけど」

美月「いろんな時を、キミと一緒に過ごしたいんだ
……」

美月「なんて、こんな恥ずかしいことも素直に言え
ちゃう。これってキャンプの魔法かな」

美月「眠りについて、目覚めたら終わっちゃう、今
だけの魔法……」

美月「もう少し……もう少しだけ……」

美月「ね……ひとつ、お願い」

美月「もう少しこっちに来て……手……握って……」

美月「眠ってしまっても……目覚めても……離さな
いで……」

美月「約束……だよ」

美月「うん……そう。多分、キミと同じことを考え
てる……」

美月「それは、子どもの頃からずっと、同じ……私
は、キミのこと……」

美月「…………（寝息）」

//FO

○おまけトラック（10）

朝起きたふたり。

美月「ふわぁぁぁぁ……」

美月「うーーーん……（大きく伸び）」

美月「よく寝たぁぁ……」

美月「キミはどうだった？」

主人公（ぐっすり）

美月「ねぇ、ちょっと眠気覚ましに川に行こうよ」

■川辺

　澄んだ水が流れている川辺。
　深いところでも膝下ぐらいのイメージ。

【9】ちょっと離れて
美月「おおー、やっぱりこの辺、水が透き通ってて綺麗だよね～」

//SE　パシャパシャ
　靴を脱いで、パンツの裾をまくって川に入っていく美月。

美月「ひゃー、気持ちいいーー！」

美月「キミも入ったらー？」

　主人公も近付いていく。

美月「そーれっ」

//SE　パシャッと水かけ（主人公に）

美月「あはははは っ」

//SE　逆に水かけ

美月「ひゃっ！　つめたっ！」

美月「もーっ、やったなー！　こらっ！」

//SE　パシャッと水かけ（主人公に）

美月「あはははっ。ねぇ、改めて付き合ってくれてありがとね」

美月「なんか……ダメなんだよね、私。キミが相手だと、昔からすぐ甘えちゃって」

美月「勝手なことばっかり言っちゃったり、色々振り回したり……」

美月「でもね……でも……それは、キミのこと……キミだから……」

主人公（いいよ、わかってるから）

美月「え……わかってるから、いい？」

美月「……キミ、やっぱり変わってるよね」

美月「こんな勝手で、甘えてばっかりの私なのに……」

美月「だから……」

　耳元で囁くように

【3】

美月「キミのこと、大好き」

美月「……ホントだよ」

美月「や、ちょ、ちょっと待って……やっぱ恥ずかしい……顔、見られない……」

美月「こんなこと、言うつもりなかったのに……」

//SE　パシャパシャと水辺を移動して

【7】

美月「でも、好き」

美月「大好き」

【5】背後から抱き付き

美月「……こんな私でも、いいかな」

主人公（もちろん）

美月「……ありがと」

【9】正面に回って

美月「また、来ようね。ふたりきりで」

美月「絶対、約束だよ！」

美月「だから、これからも……よろしくね」

//END